みらい平市民センターからはじまる　まちづくり
議事録（パネルディスカッション）

司会：　時間になりましたので、第２部のパネルディスカッションを始めさせていただきます。様々な分野で活動されている方々をお招きし、協働について考えます。

テーマは、今後のまちづくりなどについて、また、市民協働をどう進めていけば良いのか、市内外で活躍している団体の方々や企業の研究者として取り組まれているパネリストの皆様に議論していただきます。

パネリストの皆様のご紹介です。まずは２００１年にＮＰＯ法人を設立し、森づくりと自然教育を主な活動としており、本市の狸穴地区に圃場を構えておられ、２０２１年、これまでの活動が評価され、林野庁から表彰を受けられました、「ＮＰＯ法人地球の緑を育てる会」理事長の石村章子様でございます。

続きまして、ボランティア団体相互の交流、啓発、情報交換などを図ることを目的に、ボランティアセンターに登録するボランティア有志で組織されている市ボランティア連絡協議会において、今年度より副会長となられました大内仁子様でございます。

続きまして、本市と２０２０年に包括連携協定を締結。「教育、防災、コミュニティ、エネルギー」に関する分野で連携しており、今年度は本市との連携事業の一つとして、「たかさごマルシェ」を開催した高砂熱学工業株式会社から、研究開発本部副本部長の山本一郎様でございます。

最後に、ご自身もＮＰＯ法人に所属し、活動され、地域コミュニティづくりの拠点として、古民家再生事業を実践されている筑波大学システム情報系准教授の山本幸子様でございます。

また、小田川市長にも加わっていただき、５名のパネリストで進行してまいります。コーディネーターは第１部のトークセッションで、市長と対談していただいた茨城放送の北島様です。よろしくお願いいたします。

北島：　１部に続きまして、２部の司会を務めさせていただきます。

本日は、長年、ボランティアやまちづくりに貢献されている皆さんをお招きしてお話を進めたいと思います。

まず、地元で音楽を通じたボランティア活動を続けていらっしゃる大内さんに伺います。つくばみらい市でボランティア活動を始めたきっかけ、そして活動した中での苦労や課題、また、市民、あるいは市、行政に対してもっとこうして欲しいということがあれば、ご自身の体験からお話していただきたいと思います。

大内：　誰も知り合いのいなかった、このつくばみらい市には、１８年ほど前に夫の転勤でまいりました。ボランティアに入ったきっかけは、ポストに入っていた市の広報紙でした。

広報紙には、広報つくばみらいや社会福祉協議会が発行する社協だよりなどがあります。その中でボランティア募集の記事として、「朗読グループかたくり」を見つけ、当時、知り合いがいなかったため、ボランティア活動を通して、知り合いや友達になれる方が増えたらいいなという思いで入りました。

みらい平市民センターからはじまる　まちづくり
議事録（パネルディスカッション）

朗読グループかたくりの活動としましては、広報紙を音声訳して、文字や図表などを全て音声に変える作業をしています。それをメンバーで録音、編集し、ＣＤにして、視覚障害をお持ちの方などにお届けしています。

また、自身のコンプレックスとして、訛りがあり、それが朗読グループかたくりに加入したきっかけでした。参加することで標準語も教えていただけるかなと思っていましたが、メンバーの先輩には「標準語を覚えるということは、一つの外国語を覚えるということだ」という話をされました。これは難しいグループに入ってしまったと思いましたが、それでもこの地で縁を持って生活していくという、人とのつながりのきっかけづくりになったという経緯があります。

これまで続けてこられたのも、ボランティアが仕事で活きることもありますし、逆に仕事がボランティアで活きるということもあります。私の個人的なことを申し上げますと、妊活なども一生懸命行いましたが、子供に恵まれなかったという経緯がございました。そういったときに、ボランティア活動や地域活動、サークルなど、いろいろな居場所があることで、自分は救われてきたという思いがあります。

ボランティア活動の中での課題ですが、活動拠点がないということが一番です。

つくばみらい市のボランティア団体の紹介をさせていただきますと、ボランティア市民活動センターがあり、そこに登録しているボランティア団体が５０程度あります。ボランティア連絡協議会は、その内の２２の団体からなり、お互いに連携を図りながら、より地域に貢献する活動をしましょうという協議会です。ボランティアによっては荷物、機材などが多い団体があります。北島さんも所属している「おもちゃ病院」の機材や、私が所属している「ほのぼの音楽隊」の楽器、それら全てを置けるスペースがないという課題があります。

ボランティア市民活動センター内の限られた部分に荷物を置かせていただいておりますが、コロナ禍で谷和原公民館がワクチン接種会場になり、なかなか活動スペースが取れないという現状がございます。このような兼ね合いがあり、様々な課題があると思いますが、今回のテーマのまちづくりということに関して結びつけていけば、学校で空き教室があるという状況をお聞きしています。学校の空き教室を活用し、ボランティア活動をしたり、地域に開放するような形で、お互いを育て合うまちづくりということはできないかというお願いをしたいです。

北島：　今の話を聞いて、私も同感することがありました。ボランティア活動を始めて良かった点としまして、サービスを提供する相手側でなく、ボランティアする側の生きがいや居場所づくりにも重要な役割を果たしています。そうするとボランティアする側も受ける側も一緒になってボランティア活動が活性化するということですね。

次に、課題としてご指摘いただきました活動拠点についてですが、私達も色々なものを置く場所がなくて困っています。ボランティア活動の一つの共有場所、そしてボランティア活動をするのに色々な物を置く活動拠点がなかなかないといった点につい

て、何か市長からございますか。

市長：　以前からボランティアの方々より、自分たちには居場所がない、どこか場所がないかということは言われておりました。市でも空いている施設がないかと考えておりますが、なかなかボランティアの皆さんに納得していただけるような場所が取れていないというのが現状です。

空き教室というお話がありましたが、統廃合した小学校は、現在、幼稚園として使っています。そのため、教室自体は空いているところはありますが、子どもたちが生活している環境の中で、物を出し入れしたり、関係者以外の方が入るということが果たして適当かどうかということを考えると、少しハードルがあると感じています。

今後、学校の統廃合と、ボランティアの方々に場所を確保するという話を一緒にしてしまうと議論が複雑になりますので、そこは切り離し、ボランティアの方々にも納得していただけるようなスペースを確保しなければいけないと思っております。

北島：　私も廃校などを探したのですが、耐震の問題がありましたので、その辺を課題として、今後ぜひご検討いただければと思います。ありがとうございました。続きまして、石村さん。団体の名前が「地球の緑を育てる会」という壮大なお名前で素晴らしいですが、これまで経験された、活動する中での問題点や課題は、どのようなものがあるのでしょうか。

石村：　壮大な名前、「地球の緑を育てる会」の石村と申します。この会を設立して２０年になりますが、その前に私は、中国の砂漠地で“砂漠を緑に”という活動している団体に５年間、事務局長として働いており、そのときに何度も中国に渡って、木をたくさん植える活動をしてまいりました。

様々な経緯があり、そこからこの団体を立ち上げたときに、中国だけではなく、緑が必要とされる所であれば、どこでも緑を増やせるようにということで、このような名前を付けてしまいましたが、いつも紹介される時に恥ずかしい思いをします。

活動として何をしているかというと、ドングリを集め、それを育てて苗にします。その苗を活用して、依頼があったところに森づくりをするという活動を２０年してまいりました。ドングリを集めて育てるところが、縁があり、つくばみらい市の狸穴にございます。２０年前から活動していたのですが、市の皆さんにお知らせする暇もないほど忙しかったです。最近ようやく少し落ち着いてきましたので、皆さんにお知らせしたいなと思っていたところでコロナ禍になりましたが、このような機会をいただきまして大変ありがたいことだと思っています。

私は、ドングリを育てる活動のために、水やりなどの日々の管理がすごくありますので、そのために横浜からこちらに引っ越してきたというのが正直なところです。

引っ越すときに、横浜の人たちからは「何でそんな茨城の田舎に行くの」と、本当に失礼なことを言われましたが、私としてはよほど環境が良いため、なぜ皆さん田舎に来ないのと言いたいです。

それほど、私はここに住むことをありがたいと思っていますし、ここが終の棲家になると思います。ここに来てすごく思うことは、全国的にそうなのかもしれませんが、市の方々が、市民に対して一生懸命努力されているということをものすごく感じます。

この建物も郵便局の発想からここまで発展されて、市民の皆さんが活動して、そこから意見を拾ってやっていきたいというような思いも感じられます。行政に頼るというのは、私達が生きてきた時代はそうでしたけれども、市民の意見を取り入れていただける時代になったんだなと感じます。私も緑を育てていますが、育むということは、自分が誰かに教えるのではなくて、ものすごく学びがあるということです。学んで自分も成長できるというところがすごいと思っています。

野外で決して立派ではないですが、私たちの圃場が市内にあります。アナログで本当に昭和初期みたいな雰囲気のところですが、皆さんが色々な活動や外で集いたいときは来ていただければと思っております。

北島：　人間の生活が緑を壊しており、人間がいなければ、地球は緑一色になるということもあるため、身近で緑を育てているということは非常に貴重だと思います。 今の石村さんのお話を聴いて、市長はどんなお考えでいらっしゃいますか。

市長：　まずは、移り住んでいただいて本当にありがたいと思います。つくばみらい市の位置は都心から横浜と同じくらいの距離感です。しかし、横浜を知っている方は、たくさんいますが、つくばみらい市のことを知っている方は、まだごくわずかなのかなという思いでいます。

私の住んでいる集落のことをお話しますと、集会所と言われる公民館があり、そこに大きな木が生えています。欅の木や杉の木もありますが、集落の住人が高齢化しているため、その落ち葉を拾い集めて処理処分するような作業がだんだん大変になってきています。

木が大きくなると枝払いをしなくてはいけなくなり、その費用がかかるため、どうしても木を切らざるを得なくなっています。

防風林がなくなったお話を石村さんとしたのですが、だんだん田舎の風景に木が少なくなってきているというところがあります。今、地球環境ということが大きな問題です。自然エネルギーと言いながら森を切って、森をなくして、そこに太陽光発電を設置しているというような現状を見ると、どちらが正しいのだろうというような気持になります。私達行政から見ても、本当に歯がゆい思いがあります。そういったことも含めて、こういった話をこれからも勉強させていただいて、環境問題というものに取り組んでいければと考えています。

石村：　２０年活動をしてきた中で、他の都市や他のまちに行って、木を植えることの方が多かったです。そのため、中国と日本の比較、また、他の都市とつくばみらい市との比較、今まで住んでいた横浜とつくばみらい市との比較ができます。他のまちとこのまちを比較しながら、こういう点が良かった、こういう点が足りないという部分につ

いては、今までやってきた２０年が少し活きるのではないかと思っています。

北島：　ありがとうございました。次に、企業の立場で、つくばみらい市と包括連携協定を結ばれている高砂熱学から山本さんお願いします。まずは、協定を結んだきっかけや現状などについてお話し願います。

山本(一)：　高砂熱学の山本でございます。まず皆さん、高砂熱学という名前は聞きなれていないかと思いますが、私どもは、ビルの空調設備を作っている会社です。空調というと、家にあるエアコンや暖房器具のストーブなどを思い浮かべられると思いますが、私どもは、ビルや病院、ホール、あるいは競技施設などの空調設備を作っている会社です。

例をあげますと、茨城県庁や阿見町のアウトレット、東京駅の中、東京ドームなどを担当した会社でございます。本社は東京にあり、全国に支店がございますが、我々が色々な活動をする基礎となる研究所が、今までは、神奈川県の厚木にございました。２０２３年に創業から１００周年を迎え、その１００周年に向け、新たな事業でもっと色々な方々と一緒にコラボレーションできるような場所に移らなければいけないというところで、新たな土地を探しておりました。そこで、筑波大学や国の研究所、企業が近くに集まっているため、色々なことができるのではないかということで、２０１９年の３月につくばみらい市に移転させていただきました。

今まではいわゆる Business to Business で、ビルなどの会社との付き合いが多いのですが、これからは、Business to Customer で持続可能な開発も取り入れ、地域の皆さんと一緒になって活動しなくてはいけないということで、つくばみらい市と包括連携協定を結んでいます。その中で我々ができることは多くはないのですが、防災、エネルギー、コミュニティ、あとは教育、その４つをテーマに、連携の中でいろいろな活動をさせていただいています。その一つとして、コミュニティ分野において、地域の方が野菜や花、工芸品などを集めて販売する「たかさごマルシェ」を、５月をと１０月に行わせていただきました。土曜日の午前中だけの開催でしたが、５月は５００人ほど、１０月は雨が降っていたにも関わらず３００人ほどの方にお越しいただきました。また、我々の施設の中に、空調の仕組みを遊びながら勉強できる施設があるのですが、そこに小学生のお子さんたち２００人ほどにお越しいただき、非常に楽しかった、勉強になったといったお言葉をいただきました。

次に、防災に関してですが、小学校や市の施設の中でも避難所になる場所があると思います。しかし、広い場所に大勢の人々がいるため、プライバシーの確保が難しいと思います。また、コロナの問題もあり、そのような広い避難所の中でもちょっとしたプライベートスペースのようなものがあった方が良いのではないかということで、簡単に組み立てられて、なおかつ空調が簡単に出来る避難所ブースのようなものを作成し、つくばみらい市で使っていただいております。このようなことが連携協定の中で行っている事です。これからもエネルギーや教育など、取り組んでいかなければいけないことがあると思いますので、皆さんともお話しながら、さらに深めていきたい

と思っております。

北島：　ありがとうございました。こういった企業の方々がまちづくりに参加するというのは非常に大事だと思いますが、今後、市としてもこのような企業と協定を進めていかれるおつもりでしょうか。

市長：　市でも協定を結んでいる数は多いです。現在、協定というものは、ほとんど対行政・対国ではなく、企業もしくは団体とのものがほとんどです。高砂熱学さんから色々ご紹介ありましたように、高砂熱学さんとの協定は包括ということで、教育、防災、コミュニティ、そしてエネルギーの環境問題と、全てにおいて一緒に取り組んでいくといったものになっています。非常に熱心に行政にも関心を持っていただいておりますので、これは必ず市民の皆さんにも本当にプラスになる、メリットのある協定だと思っています。また、高砂熱学さんのエリアにある、エリアンサスという３ｍほど伸びるイネ科の植物があります。高砂熱学さんはエリアンサスを研究所に植えており、ペレットストーブの形にして燃料にするという取り組みをされていらっしゃいます。市でそれを耕作放棄地で出来ないかというようなことを考えたり、今いろいろと作戦を練るという状況ですので、皆さんに期待していただきたいと思っております。

北島：　他の企業とも何かされているのでしょうか。

市長：　様々な企業と連携を結んでおります。例えば、『ポカリスエット』を作っている大塚製薬さん。中止になってしまいましたが、みらい平市民センターのオープニングイベント時、大塚製薬さんに健康問題やヘルスケアの講習をしていただけるようなイベントも企画しておりました。

　また、これまで市では保育所と保護者の方が、朝こどもが熱を出したといった連絡を電話でやりとりをしていました。それを、朝の忙しい時間に先生が受けて対応するということがすごく大変でした。それを軽減しようということで都内のあるＩＴ企業さんが、つくばみらい市をフィールドにして実験したいということでしたので、包括連携という形の協定を結ばせていただきました。そして簡単にスマートフォンで双方向にやりとりができるシステムを作ったというような事もあります。今後、もっと市民の皆さんに広げていけるソフトが開発されると思います。こういったことも連携協定があり、生まれてきているところです。

北島：　続きまして筑波大学の山本先生に伺います。山本先生は、空き家や古民家再生事業に取り組んでおられます。最近は、かすみがうら市と古民家再生事業を取り組んでおられると聞いております。この古民家再生と、まちづくりとの接点というのはどんなところにあるのでしょうか。

山本(幸)：　古民家再生とまちづくりとの接点は、ものすごく密な関係にあると思っております。

　まず古民家ですが、現在、空き家でも築 50 年ぐらい経つと古民家というように言われております。古民家の定義は、はっきりと学術的に何かあるというわけではないのですが、私が考えている古民家は、戦前のものを対象としております。戦前の古民家

は、茨城県ですと、農家住宅が多かったと思うのですが、日本で一番最初に建った民家は竪穴式住居です。竪穴式住居に壁ができて立ち上がった程度のものが農家住宅で、早いものだと室町時代から農家住宅というのは存在しております。地域の衣食住の中の住まいの原型という形がずっと残っております。

現在の住宅は、日本全国同じようものになってきていますが、古民家は日本全国同じではなく、地域性が非常に豊かです。その地域の文化や生活というものをずっと継承してきたもので、地域との結びつきは非常に強いと思っております。また、古民家を活用していく上では、必ず持ち主が、何代もその土地で代々継承されてきた方ですので、その方のご協力ご理解なく古民家の活用は進みません。必ずその持ち主の方と、今後の継承や活用の意向について、一生懸命相談していく中で進めて行かなければいけません。

また、古民家というのは必ず集落の中にありますので、それを活用していく上では、集落の方たちの理解というのも非常に大事にしておりますので、まちづくりとすごく近い関係にあると思います。

北島：　例えばつくばみらい市を例にとった古民家再生はありますか。

山本（幸）：　先程ご紹介いただいたかすみがうら市の事例は、霞ケ浦の湖畔にある古民家を、私も入っている県の古民家活用研究会の事業において、モデル事業の一環として、２０１９年に古民家を再生して、ゲストハウスという宿を作った取り組みです。古民家を、住宅ではない用途に転用していくということが、今、全国的に増えております。また、その中で用途として多いのは宿でございます。宿をつくることによって、例えばつくばみらい市に来て、つくばみらい市の暮らしを体験することで、つくばみらい市を好きになって何回も来たいと思っていただいたり、移住してみたいと思っていただいたりするきっかけを作る場所とするような取り組みが全国で進められています。

また、私が最近注目しているのは、先ほど大内さんや北島さんもおっしゃっていた、居場所作りという点において、古民家が大きく貢献できるのではないかということです。２０２０年から土浦市の方で、古民家や空き家、空き店舗というものを活用した元気な高齢者の生きがいデイサービスという取り組みがされています。土浦市は、２０年ほど前から、中学校区の中の空き家などを活用して、各中学校区に１カ所ほど、全部で８カ所の生きがいデイサービスを整備しております。全国でも生きがいデイサービスを実施していますが、多くは公民館を間借りして、週に１回や月に１回実施することが多いです。しかし、土浦市は、拠点を持っていますので、月曜日から土曜日まで実施しています。６０歳から来ることができますが、２０年間実施しているため、一人暮らしになったりなど、ライフスタイルの変化があったときにも、顔なじみの人がその場所で迎えてくれますので、同世代の人たちと支え合って暮らしていける地域の居場所になっています。これは全国的にも茨城県内にも広めていきたい取り組みだと思っております。

先ほどの例は、高齢者の居場所の話ですが、高齢者に限らず、居場所があるということは、地域への愛着に結びつくということが研究でも証明されております。最近の茨城県では、若い人が高校を卒業すると、都内や首都圏の方に移り、そこからなかなか帰ってこないという課題があるかと思います。一度出ることは仕方ないですが、帰ってくるためには、子供のときに地域の愛着を育むというのが、すごく大事だと思っております。そのために、小さい子どもたちや中学生、高校生が地域の中で居場所となるような拠点を作ることができれば良いと思っています。それを古民家や空き家などを使うことによって、ローコストかつ地域に密着した形になると思います。住宅というのは、地域の中に密着しているため、一生懸命場所を探さなくても、必ず集落や地域の中に存在していますので、それらを活用して居場所を作ることができると、地域への愛着が育まれ、市民活動にもつながってくるのではないかと思っております。

また、空き家や古民家の活用についてですが、先程、大内さんがサークルやボランティアの方々が場所を探しているとお話しされていましたが、一つのボランティア団体が空き家や古民家を借りるということは、負担が大きいです。つくばみらい市にも規模の大きい古民家があると思いますので、それを一つの団体だけではなく、例えば３～５団体で借りて、部屋をシェアして使うということが、最近、古民家界隈で注目されている取り組みだと思います。

北島：　ありがとうございました。行政としてもヒントになることがあったと思います。大学は、教育等研究の他に地域貢献を最近大事にされているようですので、今の山本先生からはヒントを得たのではないでしょうか。

市長：　高齢者の生きがいデイサービスについて、つくばみらい市も現在、公民館やコミュニティセンターにおいて実施しています。どこの自治体でも居場所作りに関して同じようなサービスを行っていると思いますが、毎日できるということは、このような拠点がないとできないと思います。山本先生にご協力いただき、相談させていただくことで、空き家活用にもつながるのではないかと思いました。しかし、行政として空き家活用となると、法律を守りながら行わなければいけません。そのハードルを越えて、民間や大学の先生、生徒さんに活用方法というものを考えていただいたり、ワークショップを開くなどの取り組みをしていき、空き家の出口戦略となる有効な活用を考えられたら良いと思います。

北島：　私の住んでいる谷井田地区に結城三百石という建物がございます。ここでは歴史を学べるし、何百年物かの欅の大木などの自然が残っておりますが、茅葺屋根など、保守管理費用がかなりかかるのではないかと心配しております。このような物は、つくばみらい市にたくさんあるでしょうか。

市長：　結城三百石のほかに、古民家松本邸がございます。古民家松本邸は、指定管理者制度でＮＰＯ法人により管理・活用していただいているところですが、結城三百石は市で管理しています。また、古民家松本邸については、宿泊ができないか、集会を行え

ないか、イベントができないかと調べていくのですが、そうしますと、宿などの転用の問題になり、法律の問題をクリアしなくてはならず、そのレベルに無いという判定をされてしまっています。そこをクリアするためには、行政としてどれだけ費用をかけて直すかということになりますが、古民家松本邸は、あの雰囲気が良いので、どのように活用すれば良いのかという点は、悩んでいるところです。

北島：　ありがとうございました。先程、第１部で、市長から年度毎の目標として、漢字一文字を出しているとのお話がありました。「育」という言葉が山本さんからも出ましたが、ここで、皆さんの体験から、「育む」あるいは「育てる」というキーワードを、まちづくりにどう活かせるかということをお聴きしたいと思います。山本先生から、先程、古民家再生の話の時にありましたが、まちづくりと「育」というキーワードで、ご意見ございますでしょうか。

山本(幸)：　私の研究室の学生たちを連れて、古民家・空き家を活用した地域づくりを実践的に行っています。主な活動地域は、筑波山周辺で、場所としましては、３ヶ所ほどです。１ヶ所は筑波山の神社の下あたりで、つくば道沿いに広がっている集落です。斜面地で眺めは非常に良いのですが、限界集落のように過疎化が進んでいるところです。そこに学生達と行って、移住体験ツアーを行い、地域の人たちが気づかないような魅力を、学生目線で興味のある人達に伝えるということを行っています。また、石岡市の八郷では、茨城県内では茅葺が最も残っているところですが、石岡市が持っている茅葺民家一棟を筑波大学で借りております。そこで茅葺や今後の新しい農村の姿を考えるような研究拠点として、茅葺民家を再生して活用しております。

こういった場所で、一番私が大事にしているのは、若い人たちが、地域に携わるということの楽しさを感じて貰いたいということです。本日のトークセッションで、まちづくりが楽しいということが、すごく大事だということをお話しされていましたが、私も大学生のときに実際に地域作りに携わって、そこから魅力にとりつかれて今に至っております。学生達にも、地域づくりの楽しさや難しさも含めて知ってもらい、もし就職してすぐに地域づくりの仕事に就かなくても、必ず地域は自分が住んでいるところで存在しているものですので、そういったところで自分の育てた学生達が活躍してくれたらという思いを持って、学生達を連れて行き、地域に学生たちを育てていただいているという思いがあります。

北島：　ありがとうございました。次に、高砂熱学の山本さん。「育」についてご意見ありましたら教えて下さい。

山本(一)：　私は、教育かなと思っています。様々なまちづくりの中で、気球温暖化対策などの環境問題があり、脱炭素など、そのようなことが、これからまちづくりをしていく中で重要だと思います。例えば普通のビルでは、様々なエネルギーや電気、ガスを使うと思いますが、その約半分ほどが、空調や空調を冷やす機械などに使用されており、残りの１５％～２０％ほどが照明に使用されています。空調設備が、エネルギーを非

常に多く使っておりますので、そのエネルギーを大きく下げることが出来れば、省エネになるとともに、脱炭素社会に貢献できると考えております。環境というとどのような勉強をすれば良いかわからず、小学生や高校生、大学生もなかなか興味を持っていただけないことが多いのですが、学校で触れるなど、触れる機会を増やしてあげることによって、将来の地球環境問題に資するようなまちづくりを考える人が増えると思います。富士見ヶ丘小学校の横にある高砂熱学の施設では、森の間伐材や街路樹の剪定した枝などを燃料にして、暖房したり電気を作ったりする設備など、自然再生可能エネルギーを使った施設で、ほぼ自分たちだけで作ったエネルギーで運営する事になっております。ぜひ、そこをつくばみらい市の小学生や中学生に見ていただいて、我々が何かお話をすることによって、そういう意識を深められたらと思っております。

北島：　ありがとうございました。大内さんいかがでしょうか。

大内：　私は、地域で人と人とがどう育てあっていくかということだと思います。ＳＤＧｓの開発目標の一つに「住み続けられるまちづくり」がございますが、日々の生活に追われていると、なかなか大きなことはできません。つくばみらい市に住んで良かったと思える環境づくりをする為には、多世代が世代間を越えた交流や助け合いがあって、色々な目的が達成されると思います。つくばみらい市には、５つの協議体というものがございます。厚生労働省の生活支援体制整備事業に基づいて設けられたものですが、私は、その中の小絹協議体に所属し、毎月集まって皆さんと地域の課題を話し合っています。話し合う事は勿論大事なのですが、それをどう具現化し、解決に導いていくかということ、また、声を拾いながら、自分たちが現実的にできる事を一つ一つ、小さい事からやっていく事が大切だと思っています。

共通テーマを持っている方は、サークルなどに集まって行くと思いますが、そうではないところで協働が生まれるきっかけ作りのようなものがあればと思います。例えば、先ほど山本先生がおっしゃられた、空き家対策や古民家対策もそうですが、私もボランティアに入って、まさかこんなことができると思わなかった、まさかこんな方々と繋がれると思わなかった、今日のパネルディスカッションも、まさかこんな皆さんとお話できると思っていなかった。そういうきっかけ作りができ、育てあうことができるまちでありたいと思っています。

北島：　石村さん、いかがでしょうか。

石村：　私がこのつくばみらい市に育むという課題で行えるとしたら、自分たちが行っている緑の環境づくりになります。私たちがこの活動を行えているのは、昨年、９３歳で亡くなられた、横浜国立大学名誉教授の宮脇昭先生という方が指導してくださったからです。先生の活動は、全世界に及んで、各地で緑を作っております。その緑の作り方というのは市民ができる森づくりです。どこかの大きな会社に頼んで、大きな木を持ってきて緑を増やそうということではなかったため、これなら私達もできると思いました。ドングリを拾い、拾ったドングリをポットに植えて芽が出て、そこから小さ

な苗ができます。そのわずか３０～４０センチぐらいの苗を植えることで、本当に早い時間で大きな森を作ることができるため、市民参加型の森づくりとして、つくばみらい市で行わせていただきたいと思いながらもできておりませんので、これからだと思っております。独特な森づくりですが、これをつくばみらい市でやらせていただければありがたいと思っております。また、ボランティア団体の方々が、私たちの苗を育てる圃場に来て、音楽をされている方なら音楽をすれば良いし、体操されている方なら体操をすれば良いと思っています。また、遊び場所がないということで、つくば市の保育園の園児たちが週２回ほど、思いきり体を動かせる場所ということで来ています。園児たちはドングリを育てているわけではありませんが、千坪ほどある広い敷地を散歩するだけでも陽に当たれる、遊ぶだけでも楽しい、そういうことができれば良いと思い、続けています。

今課題としているのは、このようなことを皆さんに知っていただくことです。自分たちの努力が足りないこともありますが、自分たちも皆さんにお伝えする方法を考えないといけませんし、皆さんも積極的にこういう場に参画していただくことで、「そういうところに行ったらそういうことがあるのね」とつながっていく。つながっていくということは自分が一歩足を踏み出してみることであり、そこに育むという第一歩があると思います。そのため、様々な形で少しでも皆さんに広まって、みんなで協力していける緑を作っていきたいと思います。

また、緑は何が良いかと言いますと、防災に役立ちます。関東大震災の際、深川が大火事になり、大きな広場に逃げれば大丈夫だろうと思った人たちは、火災旋風に巻き上げられ、約４万人の人が亡くなりました。しかし、緑の森に囲まれた旧岩崎邸、現在の清澄公園になっている森の中に逃げ込んだ人は、ほとんど命を失われなかったのです。緑というのはそれだけの防災効果があります。地震や火事にも強い、そして温度を下げます。真夏に緑の側にいて、木陰に入れば、クーラーに当たるよりも、よほど自然の中は涼しいです。そのようなことを少しでも知っていただきたいですし、つくばみらい市にはそのような森がたくさんありますので、それらを知るだけでも違うと思います。皆さん、緑というと田んぼかなと思われますが、緑の概念とは何かを知ることも大事です。学びは色々あり、話すことはたくさんありますが、市民参加でできる森づくりをつくばみらい市の中で、行えたら良いと思っています。

北島：　ありがとうございました。市長が漢字一文字であらわす、「挑」、「育」、道理でいいますと、種を蒔いて、育てて、最終的には花を咲かせて実を結ぶと、これを次世代がまた種をまいて拾われてを繰り返すわけですが、非常に今後のヒントになったと思います。パネリストの皆さんのお話を聴いて一言お願いいたします。

市長：　皆さんのお話を聴いて感じたことや共通していることは、やはり「人」だと思います。人がいなければ、人のつながりがなければ何も起こらないですし、人と人とが出会うことによって化学反応が起こりますから、何かしらそこから生まれてくるという

可能性があると思います。地域づくりや環境づくり、地域のボランティアの活動、そして緑を作るという活動もそうだと思いますが、全部人がいなければ何ひとつできないことです。

私たち行政の役割が、これまでは市民の皆さんからの目線で見ると、 他の自治体と同じことをしてくれるところというような考え方がどこかにあったのだと思います。しかし、自治体ごとで特徴があり、つくばみらい市はつくばみらい市なりの自治体です。私達が提供するサービスなども、市民の皆さんがこの市役所をどのように使っていただけるかというところがあると思います。私達が要望に応えるということだけではなく、市民の皆さんが期待していることに、私達がどれだけサポートできるかということだと思います。私達は押し付けで仕事はできませんので、これからは、市民の皆さんが市役所と一緒に活動しよう、市役所と一緒に何かやりたい、ということで物事を進めていかないと、行政も参ってしまうというように感じています。公共とよく言われておりますが、公共は行政のことを指すのではなく、地域、企業、行政も含めて、全部でやることがこれからの公共だと思います。

例を１つ挙げるとすると、ここの建物を建てたのは、民間の会社であり、それを貸してくれています。また、コミュニティセンターを運営しているのは市役所ではなく、委託している民間企業です。そういった分担をしていき、行政が全てやらなくても良いというところ、そして地域の皆さんに任せられるところは、これからどんどん市民の皆さんに任せていきたいと私達も考えております。

企業に対しても同様で、つくばみらい市に来れば、便利で、仕事がやりやすいというだけの企業は、私達も、もう望んでいるというような状態ではありません。工業団地をたくさん作っておりますが、来た企業に対して、つくばみらい市に何をしてくれるのかという部分を、私達ももっと言っていかないといけません。税収が上がるから良いというような企業誘致ではなく、この企業であればつくばみらい市にこういった貢献をしてくれる、包括連携協定を結んでくれる、そういう企業に来てもらわないと、私達もメリットはありませんし、市民の皆さんも納得してくれないのではないかというように思っております。そのため、キーワードは「人」ということで、「人」を大切にする、「人」のめぐり逢いに感謝するというような気持ちで、これからも取り組んでいきたいという感想です。

北島：　行政は、他の行政で成功したものを、見学したり、視察して実施しようとしても、大体うまくいかないです。自分のところで何ができるかをアイディアとして考えないと、マネしてもなかなかはじまらないと思いますが、今日は皆さんから多くのヒントになる提案がされたと思います。また、今回は初めてのシンポジウムでしたが、これがスタートラインということで、このみらい平市民センターの活用を活発にしていただいて、まちづくりに少しでも参加していただくという契機にしていただければと思います。お越しいただいた方々から疑問やご意見がありましたら、頂戴したいと思い

ます。

参加者Ａ：　石村さんにお聞きしたいのですが、資源が無限に存在するというような趣旨だったと思いますが、ドングリでなければいけない理由はあるのでしょうか。

石村：　これは横浜国立大学の宮脇先生が、長い研究のもとに考案された植樹方法です。戦後一斉に植えられたのは杉・檜で、どこの山を見てもクリスマスツリーのような尖った山ばかりです。当時植えやすかったということもあったのでしょうが、元々自然の森ではなく、二次林です。経済的効果を生みますので、たくさん植えられましたが、役立たせるためには手入れが必要です。手入れしないと逆に荒れていってしまうので、今、日本の山々の中は本当に荒れています。現在、活用されていない輸入材が多いです。先生の考えは、本来の元々日本にあった姿の森に戻していこうというもので、それを成し得るのがほとんどドングリの木なのです。ドングリも一種類ではなく、実のなるもの。その実を拾ってきて育てて、一番安上がりで、しかも、元々地球にあったような緑に戻していきます。経済林としてスギ・ヒノキは必要だけれども、手入れしていかないと衰退してしまいますので、スギ・ヒノキだけを植えていても駄目でしょう。ドングリが落ちて、たくさん芽が出てくるのですが、根がとても深いので、すでに生えてしまったドングリを掘り起こすことは大変です。それをするのであれば、ドングリを拾って蒔けばすぐに芽が出ます。

また、先ほど防災に役立つと申し上げたのはなぜかいうと、とても根が深く、土を抱くため、土砂崩れなどを防ぎます。テレビなどで流されている土砂崩れというのは、ほとんど二次林の根っこの浅いスギ・ヒノキがそのまま流されています。そうではない防災や環境に役立つ、冬も緑の常緑の森づくりというものですと、それはドングリのものになるのです。

参加者Ａ：　ドングリがなることで、害獣が人里に下りてこないといった話も聞いたことがあります。Ｃ・Ｗ・ニコルさんもブナの木が原生林だということをおっしゃっていたので、非常に今の話とリンクしてわかりやすかったです。

石村：　人間の活動は、人間が駄目にしてしまっている部分があり、駄目にしているのであればその部分を補えば良いと思います。私が宮脇先生の話で一番感動したのは、落ちているドングリは地球の資源なのだというものです。その資源を活用することで、また元に戻るであろうということでドングリなのです。

参加者Ａ：　ありがとうございました。

参加者Ｂ：　今日は大変貴重な話をお伺いすることができました。人のつながりというのはずっと言われていることでもありますし、それが改めて必要ということと、居場所というものが必要だということもあり、勉強させていただきました。私はたまたま古民家のようなところに住んでおり、家は森の近くで、森の中に囲まれているようなところに住んでいます。

市長に先ほどのお話にあった居場所についてお伺いしたいです。小学校が統廃合して

いて、空いた小学校が二つあり、そこに幼稚園が移りました。私がその廃校となった小学校に行ったところ、幼稚園がありました。そうであれば、先ほどの居場所として、もともと幼稚園があった場所があり、そこをうまく活用できないかと思っています。老朽化など様々な問題があるのかもしれませんが、何かそのような部分の利用の仕方というのはあったのでしょうか。

市長：　現在、２つの幼稚園が移転して、その小学校に入っています。なぜ小学校に移ったかというのは、耐震の問題です。一つは、わかくさ幼稚園であり、築７０年以上の木造住宅です。耐震補強をしようということで計算しましたら、数億円単位かかるということで、それは現実的でないため、小学校が空いたそのタイミングで移転しました。

もうひとつは、三島地区のすみれ幼稚園というところで、そこも築３０数年たっており、これも同じ木造で、耐震が取れていないため、移転したという経緯があります。

もともと幼稚園のあった場所の利用方法ですが、地域のコミュニティの場所になれば良いということを考えています。私は、各小学校区に一つ一つずつ公園を作ってあげたいと考えています。子供たちからは、公園が欲しいと、どこの小学校に行っても言われます。なぜかというと、都市計画で公園を作っていないからです。元々旧集落にある小学校がほとんどですので、そのような田んぼの中にある小学校で、公園という概念はそのエリアにないのです。

そのため、このみらい平地区のように都市公園という形では、公園らしいものがなかったので、子供たちが遊ぶ場所や集まれる場所が本当に少なくなってしまっています。それが、人が住まなくなる一つの原因でもあるのかということも考えますと、集える場所ということで、公園を作りたいと思っています。小さい子供を遊ばせる場所がないので、ここには住めないという方はいらっしゃいます。そういうことを考えますと、地域の存続もやはりやっていかなければいけない大きな課題です。公園というのは、そこを助ける意味でも必要なものなのではというように考えておりますので、できればそれを何とか成功したいと考えています。

参加者Ｂ：　ありがとうございました。

北島：　皆さん活発なご意見ありがとうございました。先ほど大内さんからもありましたように、ＳＤＧｓの開発目標の一つに「住み続けられるまちづくり」がございます。これは非常に大事なことだと思いますので、これは、これからのまちづくりに向けて皆さん、念頭にいれて進めていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。